

大映スコープ

総天然色

濡れ髪三度笠

おアツイところに当てられながら

若さで暑さを吹っ飛ばす

明るく楽しいロケーション

大映京都撮影所宣伝課
京都府京都市大宮区大宮一丁目

2954号

「濡れ髪三度笠」草津ロケ記

大映の新人監督田中徳三が、新しい現代劇の時代劇を生み出す意気込みで撮影中の「濡れ髪三度笠」(カラー・スコープ)は、ロケにセツトに快調の撮影を続けているが、このほど市川雷蔵、本郷功次郎、淡路恵子、中村玉緒らの主演スターの顔を揃えて、街道のシーンを撮影、その日の話題を拾ってみると――

「濡れ髪三度笠」は、題名の示す通り役人物だけに、その撮影も道中のロケーションが半ば近くを占めるので、この酷暑の暑中に田中組メタツフは晴れさすれば毎日のようにロケ地へ出勤というわけ。今日は鎌倉草津まで長驅して、その街道の真中へ高さ三メートルのクラン台を立てての大撮影である。

シーンは徐のやくざ濡れ髪の半次郎(雷蔵)が、「男の中の男」という殺し文句にメタツフと夢って、江戸へ將軍に逢いに行くその若君長之助(本郷)を前分に仕立てていよいよ道中を開始するというところ。道連れは長之助の外に、その恋人おきき父娘(玉緒、轟木)の四人で、歩きかけると後から「半次郎さん待って」と呼びかけて追ってくるのが、彼に首ったけの鉄火女お高(淡路)というのがそのはじまり。

夏の間も忘れることのない、いとしの背の君ピンボー・ボナオ氏を持つ淡路は、このメタツフをぶった後で、少し潤子を通して「ピンボーさん」といって、この暑さにお熱いところを聞かされた雷蔵以下のメンバー、ますます暑いといった顔付きだが、田中監督はさすがに「え、その気持ちで……」とメタツフ。

ここで雷蔵の半次郎は頭をしかめて、「ここからは時勢雨に阻まれてる危険な所だから、女連れは駄目だ」とケンもメタツフに断わるのだが、淡路のお高は何といわれても半次郎に食い下って、一緒に行くこととする。ユーラスなやりとりがはじまるわけだが、撮影は同時録音だけに、いざ本番といういろいろ雑音が入ってくる。

その一つがセムの声。ジイダイ鳴きはじると、録音係はマイクをつけた長い竹竿をよりまわして、大木にとまったセムを追いまわしたり、石を投げたりする。次は、この街道を通るバスやトラック。そのたびにメタツフは路上におかれたクラン台やランプや移動レールを取りのけねばならない。その第三が、はるか上空を通る定期空路の爆音。こればかりは「今本番だから一寸待って」が利かや、メタツフは完全にお手上げの形だった。

それでも、監督以下メタツフもスターたちも青年ばかりだから、撮影待ちの間もみんな朝らか、お熱いところを聞かされたメタツフというわけでもないが、淡路の買って来たアイスクリーム、キャンデーをしゃぶながら、撮る間も休む間も、この映画の雰囲気そのままだに明るく楽しく過ぎていった。

特報

14. 7. 14